

Shakespeare の言及している動植物名

池 田 広 昭*

Plants and Animals Mentioned by Shakespeare

Hiroaki IKEDA

Abstract

All the plants and animals mentioned by Shakespeare have been picked out and listed according to their frequencies. Also, some of the characteristics that Shakespeare shows when referring to plants and animals are discussed.

1. はじめに

定性分析対定量分析という観点からすれば、Shakespeare の作品に言及されている動植物の研究においては定性的傾向が強いように見受けられる。Shakespeare が作品中に登場させる動植物名には出現頻度の偏りが認められ、言及回数が300回をこえるものもあれば、たった1回だけのものもある。こういった出現頻度の高い低いといった定量的面も、どんな動植物名が現れ、それらにどのような「性質」があるのかという定性的面とは別になんらかの意味を持つはずであり情報として十分価値がある。しかし、定量的なデータは十分明確な形でまとまっていないきらいがある。そこで本稿では、Shakespeare が作品において言及している動植物名のすべてに対して言及頻度を示すことを第一の目的とした。そして頻度を考慮に入れて Shakespeare の動植物を見渡したときに副次的になにか見えてくるものがあるとするなら、それを探ることを第二の目的とした。

2. 資料と方針

Shakespeare の言及している動植物名にどのようなものがあるのか知る手がかりとして、Schmidt の *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary*¹⁾ 全篇に目を通し、そこに動植物名としての定義が与えられて

いる語をすべて拾い出すことにした。適宜補助的に Onions の *A Shakespeare Glossary* を参照した。Schmidt の *Lexicon* は *Two Noble Kinsmen* と *Sir Thomas More* が対象外になっているので、この2篇だけに登場する動植物名がないか確認するために、*The Riverside Shakespeare* に収録されている2篇の原文に直接当て調べることにした²⁾。こうして拾い出した動植物名に見落としがないよう、安部、金城、Seager, Phipson, Rydén, Rohde, Dyer などと対照確認をした。その結果、Schmidt が動植物として扱っていないものをいくつか採用することにした。

頻度については Spevack の *A Harvard Concordance* に全面的に依存することにした。Shakespeare の全作品 (*Two Noble Kinsmen* と *Sir Thomas More* を含む) に使われている全語について頻度付きで用例がすべて列挙してあるからである。しかし、同書においても同音異義語については意味の違いによって用例が分類されていない。そこで、rose (名詞の「バラ」と動詞の rise の過去形) や bear (名詞の「クマ」と動詞) などの同音異義語は用例の一つ一つに当て判断することになった。この際に随時 Schmidt, Onions, その他と Bartlett の *A Complete Concordance to Shakespeare* を参照した。

Shakespeare は同一語に複数の異なる綴字を採用していることが多い。Schmidt と Spevack との間でも綴りが違うことがある。このような場合には、Schmidt の綴りに従うことにした。無論これに収録されていない2篇にだけ見られる語はこの限りではない。Schmidt において同音異綴字がある場合は Schmidt

平成3年9月30日受理

* 一般科

が最も代表的と認める綴字一つだけを採用した。たとえば、同語異綴字として *burr-dock*, *bur-dock*, *hard-dock*, *harlock*, *hoardock* がそれぞれ見出しになっているが、参照をたどって行くと結局 *burr-dock* 一つに行き着く。このようなときは *burr-dock* だけを採用した。

動植物名として採るものの中には、動植物名が語の一部として含まれる語 (*dogskin*, *gingerbread*)、ハイフンで結ばれた語の一部になっているもの (*bear-baiting*, *cheek-rose*, *she-fox*)、形容詞形 (*rosy*, *rooky*)、動詞形 (「犬のようにつけ回す」という意の *dog*, 「バラ色の」という意の *rosed*) が含まれる³⁾。動植物名がハイフンで結ばれた語の2番目、3番目の成分となっているものについては、*Spevack* にはハイフンでつながれた語の2番目と3番目の要素をアルファベット順に配列した表が用意されているので、これを利用してもれなく見つけ出すことができる。

原則的に個有名詞は採らないことにしたが、例外的に *dogberry* や *pimpernell* など固有名詞としての用例しかないものは採った。また、固有名詞であっても、もとの意味が色濃く残っていると思われるものは採ることにした。

同一の動植物を指し示す異なる語が存在するときには別々に採った。例えば、*bay* と *laurel*, *Benedictus* と *holy-thistle*, *ant* と *pismire*, *bat* と *rear-mouse* などである。ただし、異名同種は列挙して示すことにした。

その他動植物名とみなすものには、*acorn* (ドングリ), *chaff* (もみ殻), *hip* (バラの実), *raisin* (干しブドウ), *buff* (*buffalo* からとった革), *cry* (*hound* の一群) など、生物体の一部の名称や加工品の名、特定の動物の群を表わす語も含めることにした。また、架空の存在で動物的要素の強い *cerberus*, *phoenix* などともっぱら悪態語として使われる動物名 (*ass*, *rascal* など) も採った。

拾い出した動植物名には日本語訳と簡単な説明を付したが、これは生物学的な正確さを意図したものではない。日本語訳をするにあたっては『研究社新英和大辞典』と土居他の『英語歳時記』を主として参照した。

3. 結 果

3.1. 植 物

頻度の高いものから順に示す。見方によって植物名と言えない可能性の強い、境界領域上のもは[]で

くくって示した。日本語訳と説明は()に入れた。異名同種と考えられるもののリストを頻度順リストのあとに列挙した。

- 103回 (以下「回」略) *rose* (バラ)
- 37 *corn* (穀物, 特に小麦), *oak* (オーク)
- 29 *grass* (主としてイネ科の単子葉植物)
- 28 *willow* (ヤナギ)
- 27 [*balm*] (コウスイハッカ, 特にセイヨウヤマハッカ。ただし, 軟膏を指す。)
- 26 *lily* (ユリ)
- 20 *rush* (イ, イグサ, トウシンソウ), *thorn* (イバラ, とげのある低木), *vine* (ブドウ, 特にブドウの木)
- 18 *leek* (リーキ, ニラネギ, セイヨウネギ), *violet* (スマレ)
- 17 *brier* (イバラ, 野バラ)
- 16 *cedar* (ヒマラヤスギ), *nettle* (イラクサ)
- 15 *grape* (ブドウ, 特にその実), *mustard* (カラシ)
- 14 *apple* (リンゴ), *cherry* (サクランボ, セイヨウミザクラの実), *pea(se)* (エンドウ)
- 12 [*chaff*] (籾殻), *crab* (野性リンゴの一種), *pine* (マツ)
- 11 [*berry*] (液果, 漿果), *wheat* (コムギ)
- 10 *fig* (イチジク), [*nut*] (堅果, 木の実)
- 9 *primrose* (プリムローズ, サクラソウ), *reed* (アシ, ヨシ)
- 8 *ginger* (ショウガ), *hawthorn* ((セイヨウ)サンザシ), *oat* (エンバク, カラスムギ, オートムギ), *olive* (オリーブ), *palm* (ヤシ), *plum* (セイヨウスモモ, プラム)
- 7 *cowslip* (キバナノクリンザクラ), *flax* (アマ), *medlar* (セイヨウカリン), [*prune*] (プルーン, 乾燥したセイヨウスモモ (plum)), *rosemary* (ローズマリー, マンネンロウ), *sedge* (スゲ)
- 6 [*burr*] (*burdock* ゴボウのいが), *daisy* (ダイジー, ヒナギク), *elder* ((セイヨウ)ニワトコ), *hemp* (アサ, タイマ), *ivy* (キヅタ), *myrtle* (ギンバイカ), *plantain* (オオバコ), *yew* (イチイ)
- 5 [*acorn*] (ドングリ), *flower-de-luce* (アイリス, アヤメ, キショブ, または白ユリ, 紋章のユリ), [*husk*] (穀, さや, 皮), [*malt*] (麦芽), *marigold* (マリーゴールド, キンセンカ), *moss* (コケ),

- mulberry (クワ), onion (タマネギ), orange (オレンジ), osier(ヤナギ), pear(セイヨウナシ), rue(ヘンルーダ), wormwood((ニガ)ヨモギ)
- 4 apple-John (リンゴの一種), (Carduus) Benedictus(オオアザミ), canker(野バラ dog-rose), chestnut (クリ), date (ナツメヤシ), hazel (セイヨウハシバミ), laurel (ゲッケイジュ), mandrake(マンドラゴラ), marjoram (マヨラナ), pepper(コショウ), saffron(サフラン), strawberry (イチゴ)
- 3 apricock (アンズ), barley (オオムギ), bay (ゲッケイジュ), blackberry (ブラックベリー), cypress(シダレイトスギ属の植物, セイヨウヒノキ), daffodil(ラッパズイセン), damask rose (ダマスクバラ), darnel (ドクムギ), ebony (コクタン), elm ((ヨーロッパ)ニレ), fennel(ウイキョウ), heath(ヒース), hemlock (ドクニンジン), herb of graceまたは herb-grace (ヘンルーダ), honeysuckle (スイカズラ), musk-rose(ヤマイバラ, ジャコウバラ?), nutmeg (ナツメグ, ニクズク), oxlip (オックスリップ), pomegranate (ザクロ), rye (ライムギ), savory (セイボリー, セリ科トウバナ属), [squash] (熟していない豆のさや), sycamore(エジプトイチジク, プラタナス), thistle (アザミ), thyme(タイム, タチジャコウソウ), woodbine(スイカズラまたはセイヨウヒルガオまたはセンニンソウの類)
- 2 aspen ((ヨーロッパ)ヤマナラシ), bean (豆, 特にソラマメ, インゲンマメ, ササゲ類), birch (カンバ), bramble(ブラックベリーなどのキイチゴ類), cockle (ムギセンノウまたはドクムギ), columbine (オダマキ), currant (干しブドウまたはフサスグリ), dock (ギシギシ), eglantine(エグランタイン), fern(シダ), figo (イチジク), furze(ハリエンシダ), gillyvor(ナデシコ, カーネーション), holly(セイヨウヒイラギ), mandragora(マンドラゴラ), [mildew] (べと病, うどんこ病の菌, 白カビ), mint (ミント, ハッカ), parsnip(パースニップ, アメリカボウフウ), peach (モモ), pink (ナデシコ, セキチク), pippin(ピッピン, リンゴの一種), potato (ジャガイモ), pumpkin (カボチャ), radish (ラディッシュ, ハツカダイコン), rice (イネ, コメ), vetch (カラスノエンドウ), walnut(クルミ), wort(アブラナ属の植物, キャベツ, セイヨウアブラナなど)
- 1 aconitum ((ヨウシュ)トリカブト), almond (アーモンド), aloe(アロエ), ash((セイヨウ)トネリコ), balsamum (バルサム, balmのこと), balsom(バルサム, balmのこと), [barm] (酵母), bell (ヘアベル harebell のこと), bilberry(コケモモ), blue(ヤグルマギク?), box (ツゲ, 特にクサツゲ), broom (エンシダ), bulrush (ホタルイ属の植物, ガマ属の植物), burnet (ワレモコウ), burr-dock (ゴボウ), button (ボタン形の花の咲く植物 bachelor's button, 特にウマノアシガタとする解釈がある), cabbage (キャベツ), camomile (カモマイル, カミルレ), caper (セイヨウフウチョウボクの蕾), caraway(ヒメウイキョウ, キャラウェー(の実)あるいはリンゴの一種), caret(ラテン語を冗談で carrot ニンジンと解釈した用例), carnation(カーネーション), clove(チョウジ, クロブ), clover(クローバー), [cod] ((豆の)さや), codling (熟していないリンゴ), coloquintida(コロシントウリ), cork(コルク), crow-flower (センノウ属の植物またはキンポウゲ buttercup), crown-imperial(ヨウラクユリ), cuckoo-bud (キバナノクリンザクラの蕾またはキンポウゲまたはハナタネツケバナ), cuckoo-flower (キバナノクリンザクラ cowslip?), Cupid's flower (パンジー-pansy), damson (インシチチアスモモ), dead men's fingers(シランの一種?), dewberry(デューベリー), Dian's bud(ニガヨモギ Artemisia またはイタリアニンジンボク Chaste Tree), dog-berry(固有名詞のみの用例. セイヨウミズキ(の実)), eringo (ヒゴタイサイコ属の植物), fico (イチジク), filbert(セイヨウハシバミ), flag(アイリス, キショウブ, ガマ, ショウブなど), fumiter (カラクサケマン), fumitory (カラクサケマン), gooseberry (グースベリー, スグリ), goss(ハリエンシダ), [gourd] (にせのさいころの意というが, ウリの実の意が下敷になっていないか), harebell(ヘアベル, イトシャジン), hebenon(コクタン ebony またはヒヨス

またはイチイ yew), [hip] (野バラの実), holy-thistle (オオアザミ, サントリソウ), honey-stalk (クローバー?), hyssop (ヒソップ, ヤナギハッカ), insane root (ヒヨス henbane, ドクニンジン hemlock などとする解釈がある), [kecksy] (ドクニンジンの乾燥した実), knot-grass (ミチヤナギ), lady-smock ((ハナ)タネツケバナ), larks'-heel (ヒエンソウ), lavender (ラベンダー), leather-coat (リンゴの一種), lemon (レモン), lettuce (レタス), line (シナノキ, ボダイジュ), locust (イナゴマメ?), love-in-idleness (ビオラトリコロール), [mace] (メース, ニクズクから作る香辛料), mallow (ゼニアオイ), Mary-bud (マリーゴールド), [mast] (ブタのえさになるドングリ), mistletoe (ヤドリギ), mushroom (キノコ, マッシュルーム), narcissus (ラッパズイセン), pansy (パンジー), parsley (パセリ), pig-nut (ピーナットの類), pimpernell ((ペニバナ)ルリハコベ。固有名詞としての用例のみ), piony (pioned という形で使われていて, excavated の意とされるが, リュウキンカ marsh-marigold の可能性も指摘されている), plane (プラタナス, スズカケノキ), pomewater (リンゴの一種), poppy (ケシ), poprin (セイヨウナシの一種), Provincial rose (プロバンサル・ローズ), purple (シランの一種), quince (マルメロ, カリン), [raisin] (干しブドウ), rhubarb (ダイオウ), samphire (クリスマス属の植物), senna (センナ), spear-grass (葉が長くとかがってかたい単子葉植物), sweeting (甘いリンゴの一種), toadstool (毒キノコ。固有名詞的用例のみ。), turnip (カブ), warden (ウォーデン, 料理用セイヨウナシ)

名が異っていても同じ植物を表すもの,あるいは,その可能性のあるものは以下のとおりである。

{ acorn mast	{ balm balsamum balsom	{ bay laurel	{ bell harebell

{ burr burr-dock	{ cabbage wort	? { clover honey-stalk	
			? { cuckoo-bud cuckoo-flower (buttercup)
? { cuckoo-bud cuckoo-flower lady-smock	{ Cupid's flower love-in-idleness pansy		
		{ daffodil narcissus	{ dead men's fingers (long) purple
? { Dian's bud wormwood	? { ebony hebenon		
		{ filbert hazel	? { flag bulrush
{ fumiter fumitory	{ furze goss		
		? { hebenon yew	{ herb of grace rue
{ mandragora mandrake	{ margiold Mary-bud		
		? { plane sycamore	

以上, 植物名として言及されているものの総数は 222 であり, 総言及回数は 1,083 回である。種 species あるいはそれに近いものを単位とするなら, おおよそ 170 種前後が言及されていることになる。

3.2. 動物

動物については傾向が読み取り易いようにあらかじめ哺乳類, 鳥類, 爬虫類, 両生類, 魚類・貝類, 昆虫, 架空動物, その他の 8 つに分類して, それぞれの類の中で頻度順に示す。分類が難しいものも, できる限り, 最適と思われるどこか一箇所に分類することにした。ただし, 「ヘビ」, 「イモムシ」, 「ミミズ」など広い意味を持つ worm だけは例外として, Schmidt の解釈を参考に, 爬虫類に 16 例, 昆虫とその他に, 重複はするが, 56 例ずつを割り当てた。

植物名同様, 動物名も, そうでないものとの境界領域上のものには [] を付した。異名同種のリストも用意した。

本稿の最後に, Appendix として, 8 つの類に分類する前の混合した状態における頻度順のリストを頻度 5

まで記しておいた。

哺乳類

- 363 回 (以下「回」略) horse (ウマ)
 214 dog (イヌ)
 145 lion (ライオン)
 102 ass (ロバ)
 91 rascal (猟に向かないやせたシカ)
 69 bear (クマ)
 64 wolf (オオカミ)
 63 sheep (ヒツジ)
 57 lamb (子ヒツジ)
 53 bull (去勢していない雄ウシ)
 51 cur (野良犬, 野犬)
 47 ape (エイブ, 類人猿)
 45 hound (猟犬)
 44 cat (ネコ), deer (シカ)
 42 boar ((去勢していない) 雄ブタ, イノシシ)
 41 fox (キツネ)
 36 steed (ウマ, 特に乗用馬, 軍馬)
 35 calf (子ウシ)
 33 jade ((こき使われた) やせ馬, 癖の悪い馬)
 30 tiger (トラ)
 29 hare (ノウサギ, ヘア)
 25 mouse (ハツカネズミ)
 24 ox (ウシ, 特に去勢した雄ウシ), rat (クマネズミ, ネズミ)
 18 cow (雌ウシ)
 17 goat (ヤギ)
 16 [flock] (ヒツジの群)
 15 ewe (雌ヒツジ), ram (雄ヒツジ), swine (ブタ)
 13 greyhound (グレイハウンド), monkey (サル), shrew (トガリネズミ)
 12 colt ((雄の) 子ウマ), whelp (子イヌ, 熊やライオンの子)
 11 buck (雄ジカ), courser (駿馬, 軍馬), hart (雄ジカ, 特に5歳以上の red deer について), mare (雌ウマ), pig ((子)ブタ), puppy (子イヌ), spaniel (スパニエル, 猟犬の一種)
 10 mule (ラバ), sore (4歳の雄ジカ), whale (クジラ)
 9 doe (雌ジカ), neat ((角のある) 家畜, 畜牛)
 8 stag ((特に5歳以上の) 成熟した雄ジカ)

- 7 elephant (ゾウ), hind ((3歳以上の red deer の) 雌ジカ), hog (ブタ, 去勢した雄ブタ), leopard (ヒョウ), lioness (雌ライオン), mole (モグラ), [team] (同じ車や犁などを引く一連のウマ), weasel (イタチ)
 6 baboon (ヒヒ), bat (コウモリ), brach (猟犬の雌), camel (ラクダ), coney (コニー, (アナ)ウサギ), dolphin (イルカ), mongrel (雑種犬), palfrey ((軍馬と区別した) 乗用馬), pricket (2歳の雄ジカ)
 5 cattle (ウシ, 畜牛, 家畜), [cry] (猟犬の一群), wether (去勢した雄ヒツジ)
 4 [buff] (buffalo からとる革), [civet] (シベット, 麝香猫からとる香料), cut (尻尾を切った, または, 去勢したウマ), gelding (去勢したウマ), heifer ((3歳未満でまだ子を産まない) 若い雌ウシ), mastiff (マスティフ), mutton (ヒツジ, 羊肉としての用例でないもの), pard (ヒョウ), rabbit (アナウサギ, 家ウサギ), roan (葦毛のウマ), roe (ノロ), sow ((成熟した) 雌ブタ), urchin ((ヨーロッパ) ハリネズミ)
 3 beef (ウシ, 牛肉としての用例は含まない), [cheveril] (ノロの革), cub (肉食獣の子), ferret (フェレット, ヨーロッパケナガイタチ), fitchew (ケナガイタチ), hedgehog ((ヨーロッパ) ハリネズミ), otter (カワウソ), panther (ヒョウ, パンサー), polecat (ケナガイタチ), porpentine (ヤマアラシ), sore (3歳の雄ジカ), squirrel (リス), wild-cat (ヤマネコ)
 2 Barbary (バーバリー馬), bavian (ヒヒ), beagle (ビーグル), bitch (雌イヌ), bullock (去勢した雄ウシ), fawn (子ジカ, 特に乳離れしていない1歳以下の子), foal ((特に1歳以下の) 子ウマ), gib (雄ネコ), hackney (貸ウマ), jennet ((アラブ馬の系統で) スペイン産の小馬), kitten (子ネコ), [long-tail] (イヌのこと), nag ((年を取った) やくざ馬, 駕馬), [sable] (クロテンの皮), steer ((4歳未満の) 雄ウシ), tike (やくざ犬, 野良犬)
 1 asinico (ロバ), bloodhound (ブラッドハウンド), brock (アナグマ), canus (イヌのこと。正しくは canis (ラテン語)), cat-o'-mountain (ヤマネコ, ヒョウ), [cornet] (ウマの群),

[crop-ear] (耳の端を切り取ったウマ), demi-wolf (イヌとオオカミの雑種), dormouse (ヤマネ), dun (河原毛または月毛のウマ), eanling (生まれ落ちたばかりの子ヒツジ), farrow (一腹のブタの子), Galloway nag (ギャロウェイ産の小ウマ), hedge-pig (ハリネズミの子), horn (シカ), horn-beast (シカ), hyen (ハイエナ), Iceland dog (アイスランド・ドッグ), [kennel] (イヌの群), kine (雌ウシ), lym (ブラッドハウンド), marmoset (キヌザル, マーモセット), moldwarp (モグラ), musk-cat (ジャコウネコ), ounce (オオヤマネコ, 《ユキヒョウ》), porpus (ネズミイルカ), rear-mouse (コウモリ), rhinoceros (サイ), shough (毛むくじゃらのイヌ), sumpter (駄馬, 荷馬), [trundle-tail] (尻尾の巻いている犬), wat (ノウサギの伝統的名), water-rug (ブードルの一種)

異名同種, またはその可能性のあるものは次のとおり。

ape	monkey	[baboon]	[asinico]	[ass]	[baboon]	[bavian]	[bat]	[rear-mouse]
[bloodhound]	[lym]	[buck]	[stag]	[bullock]	[ox]	[canus]	[dog]	
[cattle]	[neat]	[civet]	[musk-cat]	[hare]	[rabbit]	[cow]	[kine]	[wat]
[cur]	[mongrel]	[tike]	[deer]	[horn]	[horn-beast]	[dolphin]	[porpus]	[fitchew]
[hart]	[stag]	[hedgehog]	[urchin]	[leopard]	[(panther)]	[moldwarp]	[mole]	
								[pard]

哺乳類の名の総数 144。

哺乳類の合計言及回数 2,344 回。

鳥類

47 crow (カラス)

- 45 dove (ハト)
 43 goose (ガン, ガチョウ)
 40 cock (オンドリ, 一般に鳥のオス), eagle (ワシ)
 35 owl (フクロウ, ミミズク)
 31 raven (ワタリガラス)
 30 lark (ヒバリ)
 29 dam (雌の親鳥)
 24 cuckoo (カッコウ)
 20 hawk (タカ, 小型のワシタカ亜目の鳥)
 18 kite (トビ)
 15 duck (カモ, アヒル), falcon (ハヤブサ, 雌ハヤブサ), pigeon ((《イエ》)バト)
 14 nightingale (ナイチンゲール, サヨナキドリ), sparrow (スズメ), swan (ハクチョウ), turtle (-dove) (コキジバト)
 13 gull (まだ羽毛の生えそろっていない飛べない鳥)
 12 capon (去勢した雄ドリ)
 10 hen (メンドリ, 一般に鳥の雌), wren (ミソサザイ)
 9 parrot (オウム), wood cock (ヤマシギ)
 8 chuck (ヒヨコ), daw (コクマルガラス), vulture (ハゲワシ)
 7 chicken (chick より大きいヒヨコ, ヒナ), chough (ベニハシガラス), Philomel(a) (ナイチンゲール, サヨナキドリ), swallow (ツバメ), wild-goose (野生のガンヤカリ)
 5 aery (ワシの巣ビナ), jay (カケス), peacock (クジャク), turkey (シチメンチョウ)
 4 cormorant (ウ), lapwing (タゲリ)
 3 cygnet (ハクチョウのヒナ), loon or lown (アビ), pelican (ペリカン), puttock (トビ), rook (ミヤマガラス)
 2 buzzard (ノスリ, ハチクマ, コンドル。平凡なタカ), chanticleer (オンドリの《擬人化》), chick (ヒヨコ, ヒナ), cockerel (若いオンドリ), coostril (チョウゲンボウとの解釈がある), estridge (ダチョウまたはオオタカなど), finch (フィンチ, アトリ科の鳥), gosling (ガチョウのヒナ), halcyon (ハルシオン, カワセミ), howlet (フクロウ, ミミズク, フクロウの子), martlet ((《イワ》)ツバメ), osprey (ミサゴ), oussel (クロウタドリ), partridge (ヤマウズラ, イワ

シャコ), pheasant(キジ), pie(カササギ), quail (ウズラ), robin-redbreast(ヨーロッパコマドリ), throstle(ツグミ), wild-duck(野鴨, 特にマガモ)

- 1 barnacle(ガチョウの一種, カオジロガン?), bunting(ホウシロ), chough hoar(コクマルガラス, 小ガラス), dive-dapper(カイツブリ), eyas(タカの巣ビナ, 巣から取った子鷹), hand-saw(サギ heron とする解釈がある), hedge-sparrow((ヨーロッパカヤクグリ), ノドジロムシクイ), mag(g)ot-pie(カササギ), mallard((マガモ), カモ・アヒル類の雄), musket(コノリ, ハイタカの雄), night-bird(夜鳴く鳥, ナイチンゲール), night-crow(夜鳴き鳥, フクロウまたはゴイサギ), night-raven(夜鳴くカラス, ゴイサギ), ostridge or ostrich(ダチョウ), pajock(クジャク), paraquito(インコ, 小型のオウム), popinjay(オウム), pullet(1歳に満たない若いメンドリ), raddock(ヨーロッパコマドリ), snipe(シギとする解釈がある), staniel(劣ったタカ), starling(ホシムクドリ), tassel-gentle(雄のタカ, オオタカの雄), tercel(雄のタカ), thrush(ツグミ), wagtail(セキレイ)

異名同種, またはその可能性のあるものは以下のとおり。

- | | | | |
|-----------------------------------|--|--------------------------------|----------------------------------|
| ? | { buzzard
hawk | { cock
chanticleer | { chick
chicken
chuck |
| { chough hoar
daw | ? | { dove
pigeon | { tassel-gentle
tercel |
| { howlet
owl | { kite
puttock | { mag(g)ot-pie
pie | |
| { ?
nightingale
Philomel(a) | { night-bird
nightingale
Philomel(a) | { nightingale
Philomel(a) | { ?
night-crow
night-raven |
| { pajock
peacock | { parrot
popinjay | { ruddock
(robin-)redbreast | |
| { throstle
thrush | | | |

鳥類の名の総数 90。
鳥類の合計言及回数 734 回。

爬虫類

- 43 serpent(ヘビ, 特に大きなまたは有毒なヘビ)
20 adder(アダ, ヨーロッパマムシ, ヨーロッパクサリヘビ)
18 snake(ヘビ)
16 worm(ヘビ)
10 viper(ヨーロッパクサリヘビ)
5 crocodile(クロコダイル)
4 aspick(エジプトコブラ, アスブクサリヘビ), chameleon(カメレオン), lizard(トカゲ)
2 blindworm(アシナガトカゲ), tortoise(特に陸生のカメ)
1 alligator(アリゲーター)

異名同種の可能性のあるものは次のとおり。

- | | |
|-------------------|----------------------------|
| { aspick
viper | { serpent
snake
worm |
|-------------------|----------------------------|

爬虫類の名の総数 12。
爬虫類の合計言及回数 129 回。

両生類

- 28 toad(ヒキガエル)
4 frog(カエル), newt(イモリ)
2 paddock(ヒキガエル), tadpole(オタマジャクシ)

異名同種は

- | |
|-------------------|
| { paddock
toad |
|-------------------|

両生類の名の総数 5。
両生類の合計言及回数 40 回。

魚類・貝類

- 13 snail(カタツムリ)
10 eel(ウナギ)
9 herring((セイヨウ)ニシン)
8 oyster(カキ)

- 6 cockle (ザルガイ)
 4 minnow ((ヒメ)ハヤ, 小魚, 雑魚), slug (ナメクジ), [stock-fish] (干したタラ)
 3 salmon ((タイセイヨウ)サケ), shark (サメ)
 2 carp(コイ), conger(アナゴ), ling(リング), luce(カワカマス), muscle(ムラサキガイ), pilcher(サーディン), Poor John(メルルーサ), spawn(タイセイヨウサケの稚魚), tench(テンチ), trout ((ニジ)マス)
 1 anchovy(アンチョビ), cod(タラ), dace(デース, ウグイ), dogfish (小型のサメ), gudgeon (タイリクスナモグリ), gurnet (ホウボウ), loach (ドジョウ), mackerel ((タイセイヨウ)サバ), pike (カワカマス), sprat (小イワシ)

異名同種, またはその可能性のあるものは以下のとおり。

{ dogfish { luce
 { shark { pike

魚類・貝類の名の総数 30。

魚類・貝類の総言及回数 94 回。

昆虫

- 56 worm (イモムシの類)
 45 fly (ハエなど飛ぶ虫)
 29 canker (ジャクトリムシ)
 18 bee (ミツバチ)
 13 wasp (スズメバチ, ジガバチ)
 11 gnat(血を吸う小さな双翅類の昆虫, ヌカカ, ユスリカ, ブユ, キノコバエなど)
 9 [hive] (ミツバチの巣, ミツバチの群)
 8 beetle(甲虫, 鞘翅類), cricket(コオロギ), flea (ノミ)
 7 butterfly (チョウ), caterpillar (イモムシ, 毛虫, 青虫), drone(ミツバチの雄), humblebee (マルハナバチ)
 5 glow-worm (ツチボタル)
 4 grub (ウジ, 昆虫(特に甲虫の)幼虫), moth (ガ)
 3 bots(ウマバエの幼虫), louse(シラミ), maggot (ウジ虫), waterfly (水の上を飛び回る昆虫)
 2 ant (アリ), breeze (ウシアブ), buzzard (ぶ

んぶん飛び回る昆虫(甲虫, ハエ))

- 1 blue-bottle(キンバエ), grass-hopper(バッタ, キリギリス), honey-bee(ミツバチ), lady-bird (テントウムシ), night-fly(夜間飛ぶハエ, ガ), pismire (アリ)

異名同種は次のとおり。

{ ant { bee { canker
 { pismire { honey-bee { caterpillar

昆虫の名の総数 30。

昆虫の総言及回数 270。

架空動物

- 21 dragon (ドラゴン, 龍)
 16 phoenix (フェニックス)
 10 mermaid (人魚)
 8 basilisk (バジリスク)
 5 hydra (ヒドラ, ヒュドラ)
 4 cerberus (ケルベロス), cockatrice (コカトリス), unicorn (ユニコーン)
 3 centaur(ケンタウロス), harpy(ハルピュイア, ハービー), leviathan(レビアタン), siren(セイレーン)
 2 griffin(グリフィン), pegasus(ペガサス), sea-maid (人魚), sea-monster (海の怪物あるいはクジラ)
 1 fire-drake (火竜), gripe (グリフィン), minotaur(ミノタウロス), sagittary(サギタリウス), salamander(サラマンダー), satyr(サテュロス), sphinx (スフィンクス)

異名同種は次のとおり。

{ basilisk { centaur { griffin
 { cockatrice { sagittary { gripe
 { mermaid
 { sea-maid
 { siren

架空動物の名の総数 23。

架空動物の総言及回数 99。

その他の動物

- 56 worm (ミミズの類)
 15 spider (クモ)
 7 coral (サンゴ)
 5 crab (カニ), scorpion (サソリ)
 2 mite (チーズにたかるダニ), shrimp (小エビ, シュリンプ), spinner (クモ)
 1 cuttle(イカとする解釈がある), horse-leech(ウマビル), leech(ヒル), prawn(プローン, クルマエビ), scamels(不明。鳥のことを指すようである), tick(ダニ), [vermin](害獣, 害鳥)

異名同種の可能性は $\left\{ \begin{array}{l} \text{spider} \\ \text{spinner} \end{array} \right.$ である。

その他の動物名の総数 15。

その他の動物の総言及回数 99 回。

動物全体についてまとめると次のとおりである。

Shakespeare の言及している動物名の総数 347。合計言及回数 3,753 回。

なお, worm は重複しないように数えている。

4. 結果の検討

4.1. 一般的数値

Shakespeare の植物名と動物名の使用の仕方には一般的にどのような傾向があるか, 結果をもとに数字的に検討してみることにする。

結果をもう一度繰返すと, Shakespeare の全作品中において言及されている

違った植物名の総数 222, 合計言及回数 1,083

違った動物名の総数 347, 合計言及回数 3,753

となっている。これより, 動物名の総数と合計言及回数は, それぞれ, 植物の 1.56 倍と 3.47 倍である。したがって, Shakespeare においては, 動物のほうが種類も合計言及回数も植物をかなり上回っていることがわかる。

同様の調査を英国の伝承童謡である, 俗に言う Mother Goose に対して行った⁴⁾ 際の結果と比較してみよう。対象となった Mother Goose の唄約 1150 のうち,

植物名 90, 合計言及回数 459

動物名 197, 合計言及回数 1,481

であった。したがって, 動物名は名前の多さ, 言及回数⁵⁾の多さともに, 植物名の 2.18 倍, 3.23 倍であった。

Shakespeare の場合, 植物名の比率が Mother Goose より高いということになるが, 全体として, Mother Goose と傾向が類似していると言える。

Spevack の *Concordance*⁶⁾ によれば, Shakespeare の全作品中に使用されている語の総数は 884,647 語となっている。すると, Shakespeare の植物名と動物名の合計言及回数は総使用語数に対して, それぞれ, $1,083/884,647=0.0012$ と $3753/884,647=0.0042$ である。すなわち, 0.12% と 0.42% に相当する。この数字から動植物名の使い方が多いか少ないか判断するのは難しい。そこで次のような見方をしてみる。*Concordance* の対象になっている Shakespeare の作品数は劇曲, 詩などを含めて全部で 45 である。これをもとに作品一つ当りの平均頻度を求めると, 植物が 24.1 回, 動物が 83.4 回となる。主観的に言って植物の言及回数は少ないように思える。なお, 1 作品当りの使用語数の平均は 19,658.8 語である。

この辺で少し比較の対象を探してみよう。まず植物名に対してであるが, 松田修『植物世相史』⁶⁾ によれば, 『万葉集』と『源氏物語』の植物はそれぞれ 166 種と約 100 種である。また, 『聖書』には植物が 230 種言及されているそうである⁷⁾。そしてもうひとつ, 上田・樋口の『近松語彙』に近松門左衛門の全作品に登場する植物名の一覧表がある⁸⁾ ので, それを数えると 521 である。これらと比較して, Shakespeare が言及している植物名⁹⁾の数は近松には遠く及ばないものの, 一家としては多いと言ってもよいであろう。動物については『近松語彙』の動物名一覧表⁹⁾に 442 見えるのと, 『万葉集』の約 128¹⁰⁾ という 2 つの数字しか今得られないが, これらと照らし合せて, Shakespeare の言及している動物名は多いと言えるだろう。

合計言及回数については比較の対象として, ただ一つ, 村山リウ監修大貫茂写真・文『花の源氏物語』¹¹⁾ に『源氏物語』の全部で 794 首の歌のうち 333 首に植物が詠み込まれていて, 地の文には 1,000 カ所ほど植物が出てくると記してあるのが今得られる数字である。これだけでは残念ながら判断しにくい。

頻度の分布に目を移すと, 植物において, rose が 103 回¹²⁾ と突出しているのが注目される。2 位の corn の 37 回以下は頻度の断層が見られず, rose の頻度の高さが際立っている。動物では horse の 363 回, dog の 214 回, lion の 145 回, ass の 102 回, rascal の 91 回などが頻度が高いが, 中でも horse, dog は著しい。しかし, 6 位の worm も rascal との差は大きくなく, 7 位以下

も断層なく頻度が分布している。いずれにしろ、頻度の高さが動物が植物を圧倒していると言ってよいであろう。

4.2. 植物の顔触れ

動物の horse や dog ほどではないにしても、rose の用例の多さは他を圧倒していて目立つ。しかし、その意味するところについては節を改めて論ずることにしたい。

植物全体を見渡すと、有用植物が多いのに気付く。すなわち、薬草、果物、木の実、香辛料、穀物など日常生活と密着したものがほとんどで、華やかな園芸植物、観賞用植物が大変少ない。このことは Mother Goose にも見られる傾向である。Shakespeare が人工の植物をきらっていたらしいということは、よく指摘されるように、*The Winter's Tale* の Perdita の台詞¹³⁾ から推測される。このことも園芸植物があまり見られず、かわりに花の美しい野草が沢山登場する理由のひとつであろう。

近松の植物には観賞用植物が多いことを指摘しておきたい。

4.3. 動物の顔触れ

動物名で一番最初に気付くのは、哺乳類の名の数の多さ (144) と、言及回数の多さ (2,344) である。これらは、それぞれ動物名全体の 41% と 62% に相当する。次に来るのが鳥類で名前の数が 90、言及回数が 734 であり、それぞれ全体では 26% と 20% 弱に相当する。これら以外は、両生類が低いのを除くと互いに近い数値をとる。

次に気付くのが、架空動物を除けばリストにあげられている動物の大部分がイギリスとそれを取り巻く自然環境に自然生息している動物、または、人工的に飼育している動物だということである。爬虫類、両生類、昆虫が多くないのは、こういう変温動物が緯度が日本などより北のイギリスに数多く生息することが難しく、人目に触れる機会が少ないことが反映しているのではないかと思う。このことは先に述べた Mother Goose でも同様の傾向が見られる¹⁴⁾。

頻度の上位のものを見ると、いくつかの例外を除いては、イギリスで日常よく目にする動物だということを確認できるが、これらの動物の大部分は家畜、家禽及びそれを脅す野生動物であり、また、狩猟関係の動物である。家畜や家禽は 16、17 世紀には今よりはるかに

に日常的でよく目に触れ、また、重要であったに違いない。その上、当時、王侯貴族の生活に狩猟は欠かすことができなかった。彼らを描くことの多かった Shakespeare が狩猟関係の動物名を数多く使用しているのも当然であろう。

家畜、家禽、狩猟関係の動物に対する Shakespeare、そして彼ひとりにとどまらず、当時の人たちの、関心の高さは、言及されている動物名の中に日本語のウマ、イヌ、シカ、ヒツジ、ウシ、ブタ、ネコ、ニワトリ、タカなどに相当する動物名の種類の多いことが裏付けている。ここにあげたものに対して Shakespeare が使った語をそれぞれあげてみる。

ウマ ウマは王侯貴族には特に重要である。それを表す語には、Barbary, colt, cornet, courser, crop-ear, cut, dun, foal, gelding, hackney, horse, jade, jennet, mare, nag, palfrey, roan, steed, sumpter, team がある。

イヌ イヌは狩猟の獲物を追い詰めたり、ヒツジを追ったりするのに必要である。Beagle, bitch, bloodhound, brach, cry, cur, dog, greyhound, hound, Iceland dog, kennel, long-tail, mastiff, mongrel, puppy, shough, spaniel, tike, trundle-tail, water-rug, whelp。

シカ 狩猟の獲物である。Buck, deer, doe, fawn, hart, hind, horn, horn-beast, pricket, rascal, sore, sorel, stag。

ヒツジ Eanling, ewe, flock, lamb, mutton, ram, sheep, wether。

ウシ Beef, bull, bullock, calf, cow, heifer, kine, ox, steer。

ブタ Boar, farrow, hog, pig, sow, swine。

ネコ Cat, cat-o'-mountain, gib, kitten, musk-cat, wild-cat。

ニワトリ Capon, chanticleer, chick, chicken, chuck, cock, cockerel, dam, eyas, gull, hen, pullet。

タカ タカで狩をする。Buzzard, falcon, hawk, musket, staniel, tassel-gentle, tercel。

このような動物、それも 1 つの種 (と近縁の種) に対する語彙の豊富さは、日本語に見られない英語 (を含めた西欧語) の特色である。これが哺乳類と鳥類の名の数を増やす原因になっている。

よく目にする動物は比喻に使われやすい。また、その延長線上にある悪態にも使用される。それが dog, ass, rascal, cur, fox などの頻度を上げるはたらきを

している。

Lionはイギリスに生息しない動物であるが百獣の王とみなされ、りっぱな王や貴族の代名詞となっており、紋章にも使われている。Shakespeareには史劇が多いので使用頻度が高くなっている。Eagleも百鳥の王とされ、同様の使われ方をする。

その他、何か文化的にイメージ喚起力の強い動物も頻繁に用いられる。Crow, dove, owl, raven, lark, nightingale, cuckooなどそういった例である。

爬虫類、両生類、昆虫はほとんど不快なものとして扱われている。昆虫のlady-birdおよびbeeとその仲間はプラスイメージをもつ例外的なものであるが、他の昆虫は日本のように観賞の対象になることはない。

架空動物はギリシア・ローマ神話系のものが多く、Shakespeareの教養の現れと言えようか。ただし、当時は実在すると考えられていた架空動物も多い。

Mother Gooseには魚類・貝類の言及が少ないが、Shakespeareでは少ないとは言えない。イギリスは島国でもあり釣りも盛んであるから、魚貝類は親しみ深い存在である。ただし、Shakespeareは魚や貝の名をマイナスのイメージで使うことが多い。

Shakespeareは動物の名をマイナスのイメージで使うことが非常に多いのに対して、Mother Gooseではプラスのイメージで使うことが多い。

なお参考までに近松が言及している動物の内訳を示すと次のとおりである。

哺乳類 95, 鳥類 124, 爬虫類 14, 両生類 12, 魚類・貝類 85, 昆虫 49, 架空動物 43, その他 19, 不明 1。

5. 頻度の意味するもの——作家の関心のありか

言及頻度の高い低いとは作家の関心の強さと相関関係があるのであろうか。頻度の高さは作家の関心の強さを示すのであろうか。プラスにしろマイナスにしろ関心が強い動植物に作家は数多く言及するのであろうか。答えは単純にイエス・ノーでは出せないようである。また、頻度の高低を偶然の結果だけに帰すこともできない。必然と偶然が入りまじっているというのが実情のようである。

作品には筋というものがある以上、理由もないのに、特定の動植物だけを数多く登場させることはできない。逆に、きらいだからといって言及しないわけにもいかない。

頻度の高いものは場面の描写の都合上、必然的に登

場させざるを得ないものを含むであろう。したがって、風土やその時代の生活習慣に大きな影響を受ける。生活の場面でより接触する機会の多いものが当然ながら作品でも数多く言及されることになる。

その反面好きなのをさりげなくあまり本筋と関係のないところに登場させてひそかなよろこびとすることも作家にはできる。この意味で、頻度が低いものは作家の本当の好みを知る上で決して無視できない、かえって重要なものであると考えられる。また、頻度の低いものも数多く集めてみるとやはりその時代や文化を写していることが見てとれる。

言及頻度の高いものには見逃すことのできない大切な面がある。それは実生活とは直接関係がなくても精神生活と関係の深いことがらに強い影響を受けているということである。すなわち、語のイメージである。伝統、文化、民間伝承、宗教などがイメージを形成する。西洋では『聖書』やギリシア・ローマ神話が語のイメージに大きな影響を与える。

Roseを例にとると、roseの頻度がずば抜けて高いことの背景には西洋の文学的伝統が作り出しているバラのイメージが関与している。美や愛や赤の象徴としてのバラを土台としてShakespeareがこれだけ数多くの言及をしたことは明らかである。もちろん、作家自身の好みも頻度を上げる方向にはたらいだにちがいない。また、バラ戦争の赤バラと白バラのように、Shakespeare自身も後のバラのイメージ形成に大きくかかわっている。

イギリスに生息しない、lion, ape, monkey, tiger, baboon, crocodileなどもそのイメージが頻度を高めたり、あるいは、言及そのものを引き出したりにしている例と考えられる。

頻度の低い植物も動物も、当時の本草学、民間療法、魔術などに深い関連のあるものが多く、Shakespeareの関心がこの辺にあったことがうかがえる。

頻度の高い動植物はいわば大道具であり、頻度の低いものの一部は小道具と言えるであろう。観客を大道具を上手に使うって引き寄せ、自分の本当の好みは小道具の方でさりげなく満足させていた、そういう面があったのではないかと思う。頻度の高いものの扱いは表芸に属し、低いものの方は裏芸に属すとも言えまいか。

6. おわりに

Shakespeareの動植物語彙の使用の仕方に何か特徴はないか探ってきたが、特徴らしいものもないことはなかった。しかし、これらはShakespeareだけの独自の特徴と決めつけるべき性格のものではない。Shakespeareの特徴でありながら、同時に、彼の生きていた時代や生活様式、自然の状態や社会の状態の特徴であったと考えられるからである。Mother Gooseと似た傾向を示すのも、ある意味では必然的である。

註

- 1) 詳細は参考文献を参照のこと。以下同様。著者名だけが示されている場合も同様。
- 2) *Sir Thomas More*に見られた *lym* と *parsnip* は他に見当たらないようである。*Two Noble Kinsmen* だけに現れる植物名があるが、これらは金城, Rydén, Rohde 他に指摘がある。
- 3) 具体例を一つあげると、*rose* として次のような語を採った。
ros'd, rose, rose-cheek'd, rosed, rose-lipp'd, roses, rose-water, rosy, cheek-roses (綴りは Spevack による)
 なお、*musk-rose, Provincial rose* は別に扱った。
- 4) 池田 (昭和62年と平成元年) を参照。
- 5) Preface, v ページ。
- 6) 社会思想社, 昭和51年。
- 7) H&A・モルデンケ著 奥本裕昭編訳『聖書の植物』八坂書房, 1991年, p. 184。
- 8) 『近松語彙』p. 723。
- 9) 同書, p. 722。
- 10) 中西 進編『万葉集事典』(講談社文庫) 講談社, 昭和60年, pp. 288-303。
- 11) グラフィック社, 1986年, p. 194 と p. 197。
- 12) *Rose* に関してだけ詳細に示すと次のとおりである。
ros'd 1回, *rose* 60回, *rose-cheek'd* 2回, *rosed* 1回, *rose-lipp'd* 1回, *roses* 32回, *rose-water* 1回, *rosy* 1回, *cheek-roses* 1回
 別の項目としたもので *rose* を含むものは *damask roses* 2回, *rose damask'd* 1回, *musk-rose* 1回, *musk roses* 2回, *Provincial roses* 1回

である。

- 13) "For I have heard it said, There is an art which in their piedness shares With great creating Nature."
 (*The Winter's Tale* IV. 4. 87-89)
- 14) 池田 (昭和62年と平成元年) を参照。

参考文献

- Schmidt, Alexander. *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary* (third edition revised and enlarged by Gregor Sarrazin). New York: Dover Publications, 1971.
- Spevack, Marvin. *The Harvard Concordance to Shakespeare*. Georg Olms Verlag: Hildesheim, 1973.
- Bartlett, John. *A Complete Concordance to Shakespeare*. London and Basingstoke: The Macmillan Press, 1984.
- Onions, C.T. *A Shakespeare Glossary* (enlarged and revised throughout by Robert D. Eagleson). New York: Oxford University Press, 1990.
- Evans, G. Blakemore ed. *The Riverside Shakespeare*. Boston: Houghton Mifflin Company, 1974.
- Seager, H.W. *Natural History in Shakespeare's Time*. Chicheley: Paul P.B. Minet, 1972.
- Phipson, Emma. *The Animal-love of Shakespeare's Time Including Quadrupeds, Birds, Reptiles, Fish, and Insects*. London: Kegan Paul, Trench & Co., 1883.
- Singleton, Esther. *The Shakespeare Garden*. London: Methuen & Co., 1923.
- Kerr, Jessica. *Shakespeare's Flowers*. Harmondsworth: Penguin Books, 1979.
- Fox, Levi. *An Illustrated Introduction to Shakespeare's Birds*. Norwich: Jarrold Colour Publications, 1980.
- . *An Illustrated Introduction to Shakespeare's Flowers*. Norwich: Jarrold Colour Publications, 1985.
- . *The Shakespearean Gardens*. Norwich: Jarrold Colour Publications, 1985.
- Rydén, Mats. *Shakespearean Plant Names: Identifications and Interpretations*. Stock-

holm: Almqvist & Wiksell International, 1978.

Rohde, Eleanour Sinclair. *Shakespeare's Wild Flowers, Fairy Lore, Gardens, Herbs, Gatherers of Simples and Bee Lore*. London: The Medici Society, Ltd., 1935.

Dyer, T.F. Thiselton. *Folk Lore of Shakespeare*. London: Griffith & Farran, 1883.

小稲義男他編『研究社新英和大辞典』(第5版6刷)研究社, 1982年。

上田萬年・樋口慶千代著『近松語彙』富山房, 昭和5年。
土居光知・福原麟太郎・山本健吉監修, 成田成寿編集
『英語歳時記 普及版』研究社出版, 1983年。

マクドナルド, D.W. ほか編, 今泉吉典ほか監修『動物大百科』(全20巻)平凡社, 1986年~1987年。

P. ミルワード著『イギリス風物誌』(スタンダード英語講座11)大修館書店, 1985年。

小田島雄志訳『シェイクスピア全集』(全37巻)(白水Uボックス)白水社, 1983年~1989年。

福原麟太郎・中野好大監修『シェイクスピア全集』(全8巻)筑摩書房, 1980年~1983年。

ビーター・ミルワード著中山理訳『英文学のための動物事典』大修館書店, 1990年。

加藤憲市著『英米文学植物民俗誌』富山房, 昭和54年。

加藤憲市著『英文学動物ばなし』松柏社, 昭和53年。

安部 薫著『シェイクスピアの花』八坂書房, 1979年。

金城盛紀著『シェイクスピア花苑』世界思想社, 1990年。

P. コーツ著安部薫訳『花の文化史』八坂書房, 昭和53年。

中尾佐助著『花と木の文化史』(岩波新書357)岩波書店, 1986年。

荒俣 宏著『図鑑の博物誌』リプロポート, 1990年。

荒俣 宏著『世界大博物図鑑』(全5巻)平凡社, 1988年~1991年。

荒俣 宏著『花の王国』(全4巻)平凡社, 1990年。

川崎寿彦著『森のイングランド』平凡社, 1987年。

藤本豊吉著『シェイクスピア薬品考』八坂書房, 1979年。

光瀬 龍・奥本大三郎対談『虫のいい虫の話』リヨン社, 昭和61年。

池田広昭「マザー・グースの中の植物」(『幾徳工業大学研究報告』A人文社会科学編第11号, 昭和62年)。

池田広昭「マザー・グースに現れる動物名」(『神奈川工科大学研究報告』A人文社会科学編第13号, 平成元年)。

Appendix

「Shakespeareの全作品中に言及されている全動物名頻度順リスト」(頻度5まで)

本文中においては、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、昆虫、魚類・貝類、架空動物、その他に分類して、その類の中で頻度順に示していた動物名を、そのような分類の枠をはずして全部まとめていっしょにして頻度順に並べたものが以下のリストである。同一頻度に複数の動物名が当てはまるときはアルファベット順に並べてある。頻度5まで示した。

363回(以下「回」略) horse

214 dog

145 lion

102 ass

91 rascal

72 worm

69 bear

64 wolf

63 sheep

57 lamb

53 bull

51 cur

47 ape, crow

45 dove, fly, hound

44 cat, deer

43 goose, serpent

42 boar

41 fox

40 cock, eagle

36 steed

35 calf, owl

33 jade

31 raven

30 lark, tiger

29 canker, dam, hare

28 toad

25 mouse

- | | | | |
|----|--|---|---|
| 24 | cuckoo, ox, rat | 9 | doe, herring, hive, neat, parrot, woodcock |
| 21 | dragon | 8 | basilisk, beetle, chuck, cricket, daw, flea, oyster, stag, vulture |
| 20 | adder, hawk | 7 | butterfly, caterpillar, chicken, chough, coral, drone, elephant, hind, hog, humblebee, leopard, lioness, mole, Philomel(a), swallow, team, weasel, wild-goose |
| 18 | bee, cow, kite, snake | 6 | baboon, bat, brach, camel, cockle, coney, dolphin, mongrel, palfrey, pricket |
| 17 | goat | 5 | aery, cattle, crab, crocodile, cry, glow-worm, hydra, jay, peacock, turkey, wether |
| 16 | flock, phoenix | | |
| 15 | duck, ewe, falcon, pigeon, ram, spider, swine | | |
| 14 | nightingale, sparrow, swan, turtle (or turtle dove) | | |
| 13 | greyhound, gull, monkey, shrew, snail, wasp | | |
| 12 | capon, colt, whelp | | |
| 11 | buck, courser, gnat, hart, mare, pig, puppy, spaniel | | |
| 10 | eel, hen, mermaid, mule, sore, viper, whale, wren | | |

以上、頻度 5 以上の動物名は合計 141。それ以下のものは 206。